

武蔵野英文学会 VOL.36 2003 抜刷

カンタベリー巡礼研究序説

末松良道

武蔵野大学英文学会

カンタベリー巡礼研究序説

末松良道

I はじめに

カンタベリーに行ったことのある日本人はかなり多いに違いない。イギリスへの団体旅行客もロンドンから日帰りでバスに乗ってカンタベリーに来る人がかなりおり、また、個人旅行をしている日本人旅行者も沢山やってくる。また、カンタベリーには行ったことがなくても、その名前を知っている人は更に多いだろう。そう言った人々の多くがはじめてカンタベリーを知るのは、14世紀の詩人、ジェフリー・チョーサーの『カンタベリー物語』を通してではないだろうか。

『カンタベリー物語』は、その名前とは裏腹にカンタベリーの町は単なる地名として以外は全く登場しない。この作品は、色々な小話をまとめたいわば短編集の形式になっているが、カンタベリーを舞台にした話はない。それどころか、詩人がカンタベリーを訪れた記録さえ残っていない。しかし、‘Chaucer Hotel’など、詩人の名を冠した施設はカンタベリーには大変多い。ケント大学の専門家達が書いたカンタベリーの文学ガイドにも、次のように記されている。

Anyone visiting Canterbury for the first time could be forgiven for thinking that Canterbury was Chaucer's home town. The 'father of English poetry' would have enjoyed the irony; there is no known evidence providing conclusive proof that he ever set foot inside the city gates

(Brown et al. 1990, 19).

しかし、こういう書名となったのは、周知のことではあるが、カンタベリーに行く巡礼が語った話、という枠組みを詩人が採用したからである。詩人とカンタベリーの町との縁がどれ程のものであったかは別に、読者はカンタベリーへの巡礼を理解する必要があるようだ。

巡礼というと、当然何かをお参りに行くわけだが、中世の巡礼者達がカンタベリーにおいて目指したのは、The Shrine of St. Thomasである。shrineと言う英語は「神社」の訳語として使われることが多いので、我々日本人には誤解を生みがちであるが、ここでの意味は、祭壇とか聖骨箱、あるいは霊廟であり、その祭壇が置かれていたのは、今もカンタベリーの町の中心に屹立する、巨大なカンタベリー大聖堂の内部であった。つまり、巡礼達は、具体的にはカンタベリー大聖堂に巡礼に行った、と言っても良いのである。

中世の巡礼というのは、大変大きな歴史研究のテーマであり、多くの研究書が出版されているが、本稿の意図は、中世英文学を代表する名作である「カンタベリー物語」の重要な文化的背景として、「カンタベリー巡礼」を、中世末期の文学作品や歴史研究を資料としつつ、我々外国人読者の視点から解説しようという試みである。

II トマス・ベケットと彼の殉教

カンタベリー大聖堂は、これも周知のことだが、現在でも英国国教会の本山であり、その歴史的重要性は、聖アウグスティヌスがローマ教会の命を受けて、この地に宣教のために上陸した597年に遡る。¹しかし、そのカンタベリーの名声を一層とどろかせ、人々をこの町により強く引きつける事になった理由は、言うまでもなくカンタベリー大司教、トマス・ベケット (The Archbishop of Canterbury, Thomas Becket) の殉教である。²

後に聖者とされたトマス・ベケットは、1162年にカンタベリーの大司教

になった。彼はカトリック教会の大司教ではあるが、彼を指名する実権は、イングランド王、ヘンリー2世にあったので、彼が選ばれたのは国王ヘンリーに気に入られていたと言うことを示している。任命前に、彼は王の主な相談役であると共に、友人でもあって、当時の王侯貴族の最大の娯楽のひとつであった狩りを共に楽しむ仲であった。当時のヘンリー2世はアンジュー・プランタジネット家の君主として、イングランドだけでなく現在のフランスにもかなりの領地と家来を持つ、ヨーロッパ屈指の強力な君主であった。多くの世俗の君主同様、彼にとっても、ローマカトリック教会の握る強力な世俗の権力と、王家に匹敵する教会の富と経済力が不満の種であったに違いない。彼は、自分の友人たるベケットを大司教に任命することで、イングランドにおける教会の権力と富を王権によって制御しようと考えたであろう。ベケットは、ヘンリーがイギリスの教会を支配するための道具になるはずであり、カンタベリーの修道士達は、彼を、占領軍の元帥を迎えるような思いで待ったに違いない。彼は教会にとっては渋々と受け入れざるを得なかった大司教であった。

ところが王の思惑とは裏腹に、ベケットは1162年に大司教に任命されるやいなや、今までとは違って変わってローマ・カトリック教会の熱心な代弁者となり、王の権威と対立するようふるまいに出た。就任後の1165年には、王の怒りを避けて、その後死の少し前までの6年間、フランスに避難しなければならない程、彼らの関係はこじれる。一度は和解するが、しかし、ついにベケットはヘンリーをキリスト教会から破門するという挙にでる。これを聞いたヘンリーは、真実か否かは定かでないが、「生まれもいかがわしい学僧によって主君がこのように辱められているのを看過するとは、私の家来達は何という馬鹿者揃いだ」、という意味のことを言ったと伝えられている。

What miserable drones and traitors have I nourished and promoted in my household, who let their lord be treated with such shameful contempt by a low-born clerk! (cited in Barlow 1986, 235)

これが1170年のクリスマスの頃であった。主君の言葉を聞いて、4人の騎士が、気を利かしたか、まもなくカンタベリーへと出発した。

ベケットの殺害の様子は、当時カテドラルにいたとされる聖職者、エドワード・グリム (Edward Grim) 他、数名の同時代の聖職者によって書き記されている。騎士達は戦争におもむくときの様な武装をしてカテドラルに到着した。折しも、クリスマスの祝祭期間中、1170年12月29日であった。午後のお祈りのお勤めが進んでいたが、騎士達はお構いなく、猛り狂って修道士達に叫んだ、「王と国家に対する裏切り者、ベケットはどこにいる」。³ ベケットは自ら、落ち着いた声で、「私はここにいて、私は聖職者であって、王に対する反逆者などではない」と言った。⁴ 騎士達はベケットをカテドラルの外に引きずり出そうとしたが、ベケットはその場で柱にしがみつき、祈り続けた。そのベケットに騎士達は容赦なく剣を振り下ろす。ベケットの頭の上部が切り落とされ、彼の血がカテドラルの床を染め、脳みそが散乱した、とエドワード・グリムは伝えている。興味深いことに、グリムによると、ベケットは自ら殉教者として殺害されることを望んでいたようである。彼はカテドラルの扉を閉じることを禁じた。また、彼自身のカテドラルであるから、その内奥に密かに身を隠すことも出来たであろうし、実際彼のそばにいた修道士達は彼に隠れるよう促した (Abbott 1898, I 83)。しかし、その後の彼と彼の教会の隆盛を意図して、彼は自らの血によってヘンリーの国家権力に反撃を試みようとしていたのかもしれない。そういうとっさの計算があったか否かは知れないが、彼には、死後、キリスト教圏屈指の聖者としての名声が与えられることとなる。

Ⅲ ベケットの殉教がもたらしたもの

現職の大司教が、しかも大聖堂の中で王の部下によって暗殺される、このショッキングな出来事後、1173年にベケットはローマ法王アレクサンダー3世によって聖者とされた。彼を殺したかったはずのヘンリー2世も、殺

害は自分の本意ではなかった、と言い、罪の償いのために、カンタベリーに巡礼にやってきた。王はカンタベリー郊外のハーブルダウン (Harbledown、カテドラルから1マイルほど離れており、ケント大学の近くの丘陵地) から市の城壁の外の聖ダンスタン教会 (St. Dunstan's Church) まで歩き、更にその教会から、カテドラルまでは贖罪の苦行 (penance) として、裸足で歩いた。カテドラルでは、修道士達に自分を鞭打たせたと、当時の修道士 Gervase は伝えている。ヘンリーによるこの贖罪の巡礼行は、その後の王室、そして、国内外の有力王侯貴族によるカンタベリー巡礼の伝統の始まりとなる出来事であり、以後のカンタベリーの権威を高める上で重要な出来事と言えるだろう (Webb 2000, 49)。13世紀初期から16世紀初期まで、王室のメンバーは、カンタベリー大聖堂を規則的に訪れた。チョーサーと同時代、エドワード3世は、その長い治世を通じて、カンタベリーを毎年少なくとも一度は訪れた、とバリー・ドブソン (Barrie Dobson) は書いている (Dobson 1995, 142)。

ベケットの墓は、当初50年間、カテドラルの地下聖堂 (crypt) にあった。現在では残っていないが、大理石で出来ていたと言われる。その墓の両側には大きな穴が空けられていて、そこから巡礼者達は手を突っ込んで、内部の棺に触れることが出来たという (Barlow 1997, 267)。

ベケットの死の直後から、彼が奇跡を起こすという信仰が周辺の土地の人々の間に広まった。彼の殺害の際に流された血や、血潮のついた衣服は修道士や町の人々によって集められた。ある市民は血のついた衣類の一部を持ち帰り、それを浸してベケットの血の混じった水で、病に苦しむ妻を洗ってやると、彼女の病は治癒したという。同様に、目が見えるようになった、という話もある。ローマ教会が、こうした奇跡をねつ造し、宣伝した、という皮肉な見方も出来るかも知れないが、事実は、少なくとも最初の2、3年までの奇跡の報告は、地元のものであり、民間信仰の高まりという性格を持っていたと思われる。死の直後、3ヶ月間カテドラルは閉じられていたが、この門が外の信徒達に開かれると、聖トマスが起こすと言われる奇跡の数々はヨーロッパ中に知られ、イングランドだけでなく、ヨーロッパ各地から数多

くの巡礼達を集めるようになった。地下の仄暗い聖堂には多くの巡礼者がひざまずき、ある者は病が癒えた、ある者は、目がよく見えるようになった、と、聖者の行う奇跡に驚喜していたかも知れない。カテドラルでは、こうした奇跡を記録するために特別な書記官を置いた。彼ら、Benedict of PeterboroughとWilliam of Canterburyは、これから数十年間にわたって、ベケットによってなされたと見なされる奇跡を記録し続けた。彼の死後15年の間に、700件以上もの奇跡があったと報告されている。

彼の死とその後の奇跡において重要な要素は、殺害が極めてドラマティックであったこと、そしてその時に流された血が、聖水による奇跡の頻発に結びついたことであろう。西欧キリスト教は、この時代、極めて情動的な、いわゆる affective faith と呼ばれる傾向に進みつつあり、この流れはやがて、叙情詩、ミスティックや聖史劇などにおいて文学的な表現を獲得する。ベケットの死は、凶らずもまさにキリストのローマ兵による磔刑を模したものであった。彼の死の直前には、カテドラルの修道士が騎士達におびえて逃げ去ったが、しかしエドワード・グリムを含む数名の者が最後まで彼のそばを離れなかった事も (Abbott 1898, I 85-86)、キリストの逮捕の時の使徒とペテロの事を思い出させる。彼の孤独と苦しみはキリストの孤独と苦痛を象徴し、そして、彼が起こすことになる奇跡はキリストの代理人としての奇跡なのである。

ベケットの起こす奇跡は、当初はカンタベリーとその周辺に限られ、ケント地方の民間信仰の様相を呈していたが、やがて、イングランド全土、そして海外でさえ、ベケットが起こしたと言われる奇跡が記録されるようになった。これは、カンタベリーから聖水や聖遺物が巡礼達によって各地にもたらされ、それがまた奇跡を引き起こすということになった点が大い。また、日本でもよく見られるように、ベケット信仰を宗旨とする教会や修道院が各地に出来、それらの聖堂とそこに納められている聖遺物がまたベケットの奇跡を引き起こすことにもなる。

こうして記録された様々の奇跡は、それ自体、歴史的、宗教的に極めて興味深い資料であると同時に、21世紀の我々にとっては、中世ヨーロッパの

人々が残した貴重な宗教説話文学とも言える。そこには娯楽や芸術性を目的として書かれた文学作品とは違う、中世人の姿が描き出される。私が興味を感じるのは、ストレートな奇跡の記述に混じっている、大変実利的な奇跡の記録である。その例として次のような話がある。

ドーバーからやってきたCurbaranという靴屋の若者は、毎日聖者の為に神に祈ることを日課としていた。彼は、「聖者の為に祈る」という事自体が大変大それたことである、と知らないくらい無垢な若者であった。ある時、その彼の夢の中にベケットが現れた。若者は無邪気にも、「あなたは誰?」と聞くと、聖者は「カンタベリー大司教、トマス・ベケットである」とお答えになった。ベケットは、ある水車小屋の事に触れて、「そこにある、にわたこの木の下にあるものを取りなさい」と言われた。Curbaranは目覚めた後、まず教会に行き祈り、その後、夢の中のお告げを思い出して、水車小屋に行くと、ベケットが言ったとおり、錆に被われた金色のコインがあった。他の人に見せ、注意深く錆を取り払うと、それはたくさんの金貨であると分かった。(抄訳、Benedict of Peterboroughによって書き残された。M. Staunton 2001, 207)

日本の昔話にも見かけられる、意図せずに正直者が報われる、宝探しの話のようである。

次の話は奇跡のほとんどを占める治癒の奇跡を記したもののだが、聖者と信者の関係を示す上でひとひねりしてあり、興味をそそる。

ジョーダンという著名な騎士がいたが、伝染病の流行で息子ウィリアムも病に落ち、亡くなってしまった。丁度そのころ、騎士の屋敷にベケットの墓にお参りに行った巡礼の一行20人が滞在していて、ジョーダンは彼らを手厚くもてなした。彼はベケットが彼の息子を救ってくれると信じて、すぐに埋葬をせず、息子の口に巡礼達の残していった、カンタベリーの聖者の水を注ぎ込んだ。すると驚いたことに、死んだはずの息子が目を開き、言った、「父よ、ああ、何故泣いているのですか。殉教者ベケット様が、あなた方に私を返してくださいました」と言うではないか。

そこで、ジョーダンは、四旬節の間に、カンタベリーのベケットの霊

廟へお礼の巡礼に行くことを誓った。しかし、その後ジョーダンは忙しさにかまけて、巡礼の約束を一日のばしにしてしまう。そこで、ベケットの霊は苛立ったのか、あるハンセン氏病患者の夢に現れて、「もしジョーダンが巡礼にすぐに来なければ、彼に大きな不幸が訪れるだろう、即ち、彼のもう1人の息子を失うことになろう」と預言する。そこで、ジョーダンは巡礼に行く日を決めるのだが、あいにく、その時期に彼の主人である貴族が突然ジョーダンの屋敷を訪れることになる。ジョーダンが巡礼を再度延期すると、彼のもう1人の息子が病に落ち、死んでしまう。また、彼と彼の妻も酷い病に落ちる。更に彼の屋敷の使用人など20人もまた病にかかった。しかし、彼らはカンタベリーからもたらされた水を飲むと元気を回復した。ジョーダンはベケットの怒りを買ってしまったことを自覚し、半ば死を覚悟して、妻と残された息子と共にカンタベリー巡礼に旅立つ。妻は特に大変具合が悪かったが、彼らはカンタベリーの塔が見え始めたところから、裸足で歩いて巡礼を完了したのだった。(抄訳、William of Canterburyによる。Abbott 1898, II 128-43)

この奇跡物語には、ベケットという聖人の意外なる執拗さが現れているが、当時の社会と関連づけて考えると、病を癒すと言われる聖なる水だけで片づけて、主人へのお勤めだのといった俗事にかまけてカンタベリー巡礼を怠ってしまう平凡な市民に対する教会の警告が見て取れるように思える。

IV カンタベリー巡礼

ベケットの遺骨は1220年7月7日に、カテドラルの最奥部、The Trinity Chapelと呼ばれている部分に建設された霊廟 (shrine) へと移される。これはカテドラルの内部にあって、遺骨を納めてあった建築物であり、カテドラルの床から計ると、恐らく人の背丈の2、3倍の高さはある、大きなものであったと考えられている。チャーサーの『カンタベリー物語』の巡礼たちもここを訪れたのであろう。

Thanne longen folk to goon on pilgrimages,

And palmeres for to seken straunge strondes,
To ferne halwes, kowthe in sondry londes;
And specially from every shires ende
Of Engelond, to Caunterbury they wende,
The hooly blisful martir for to seke,
That hem hath holpen whan that they were seeke. (I 12-18)

12世紀末から、イギリスがヘンリー8世の宗教改革によってローマ・カトリック教会と袂を分かち16世紀前半(正確には1534年)まで、カンタベリーは、中世西ヨーロッパにおける最大の巡礼地のひとつとして、国内外の人々を集め続けた。カンタベリーがイングランドの人々にとって如何に重要な巡礼地であったかを、バリー・ドブソンは次の様に述べている。

Indeed, it might well be surmised, although it cannot be proved, there were few late medieval English men (and even Englishwomen) who did not harbour at some time or other of their lives the desire to go on pilgrimage to Canterbury. (Dobson 1995, 140)

しかし、ベケットの残虐な殺害の記憶も生々しい12世紀末、そして、ベケットを個人的に知っていた修道士が残っていた頃ならまだしも、チャーサーと、彼が偶然ロンドン郊外の宿屋で出会った巡礼達が一団となってカンタベリーへと向かった14世紀末に、ベケットの死のインパクト、彼の成すと言われる奇跡の数々への信仰がどれほど人々の心に残っていたであろうか。もちろん病の治癒を念じて、薬にもすがらないで弱った体に鞭打ってカンタベリーへの道を進んだ者達も数多くいたであろう。それは、現代日本の寺社仏閣でも変わらない。しかし、『カンタベリー物語』がまさにその良き証であるように、物見遊山しながら、巡礼は単なる口実として、現代の観光客のように、カンタベリーの有名なベケットの霊廟に詣でた者が段々と多くなった、いや大多数となった、と言って良いかも知れない。巡礼という名の元に物見遊山にふけり、あちらの教会に詣でた、こちらの聖者を拝んだ、と吹聴している自称「巡礼者」をラングランドは厳しく糾弾している。

Pilgrymes and palmeres plighthen hem togidere
 For to seken Seint Jame and seintes at Rome;
 Wenten forth in hire wey with many wise tales,
 And hadden leve to lyen at hire lif after.
 I seigh somme that seiden thei hadde ysought seintes:
 To ech a tale that thei tolde hire tonge was tempred to lye
 Moore than to seye sooth, it semed bi hire speche.
 Heremytes on an heep with hoked staves
 Wenten to Walsyngham — and hire wenches after:
 Grete lobies and longe that lothe were to swynke
 Clothed hem in copes to ben knowen from othere,
 And shopen hem heremytes hire ese to have. (Prologue 46-57)

また、カンタベリーが大陸とロンドンの中継地であるという地理的な特徴も、大巡礼地として発達した重要な理由であろう。人々は、商売や外交、戦争への出征など、様々な公私の旅の途中に、ベケットにお祈りをしていたことだろう。フランスやオランダなど、イングランドと行き来の多かった大陸の国の人々にとっても訪れやすい土地であり、中世においても外国人の巡礼や住人も多かった。⁵ フランス語の年代記作者フロワッサールは1395年に英国を訪れているが、ドーバーに上陸した後、カンタベリー詣でをしたと記している。その時、丁度リチャード2世がカンタベリーを訪れようとしていることを知った。

I learnt that the King was coming on pilgrimage on the Thursday. He was back from Ireland where he had been campaigning for about nine months and was anxious to visit the cathedral of St Thomas of Canterbury, both out of reverence for the honoured body of the saint and because his father's tomb is there. So I decided to await him, which I did. (Froissart 1968, 404)

フロワッサールはカンタベリー近くのリーズ城で王に会うことに成功し、持

参した紹介状を見せ、自分の本を贈ったりしている。また、その過程で、王の臣下である Sir William de Lisle という騎士と出会い、共に旅をし、親しく交際していることなども書き残している。こうしてみると、彼にとってのカンタベリーは、まずドーバーに上陸した場合には当然立ち寄るべき有名な場所であり、更に、王族や大貴族などの要人も訪れるところであって、いわば種々の人脈を開拓するのに都合の良い都市のように見える。

こうしてカンタベリーは大司教の首座であるという重要性に加えて、ベケット巡礼の地として、宗教的にも経済的にも大きな求心力を持つに至る。巡礼達はカンタベリーに宿泊し、食事をし、巡礼の記念に何か買って帰ったであろう。カテドラルの敷地に入る正門、クライスト・チャーチ門 (Christ Church Gate) のまわりには幾つかの宿屋 (inn) が立ち並んで、旅行者としての巡礼達の必要を満たしていた。今も昔も旅行者の多くが、旅先で、日頃よりも贅沢な食事と、疲れた体を休ませる深い眠りを求めるだろうが、中世イギリスの巡礼者達も同様であっただろう。チョーサーと『カンタベリー物語』の威を借りた垂流作品、あるいは「続編」のひとつ、ジョン・リドゲイト (John Lydgate) の *The Siege of Thebe* (1410) のプロローグでは、ロンドンから同行してき来た宿屋の主人 (Host) が、チョーサーの原作で既にお馴染みの陽気で冗談交じりの口調で、次のように詩人リドゲイトに呼びかける。

Thogh ye be soul, beth right glad and light,
 Preiying you soupe with us tonyght,
 And ye shal han made at youre devis
 A gret puddyng of a rounde hagys,
 A Franch-mole, a tansey, or a froyse. (Bowers 1992, 97-101)

Aftere soper, slepe wol do non ille.
 Wrappe wel youre hede clothes rounde about.
 Strong notty ale wol mak you route.
 Tak a pylow that ye lye not lowe;
 Yif nede be, spar not to blowe! (Bowers 1992, 108-12)

リドゲイトの作品同様、1410年頃書かれた作者不詳の、『カンタベリー物語』の続編、*The Tale of Beryn*では、実際にカンタベリーに存在し、現在でもその多くが残っているThe Checker of Hopeという宿屋が出ており、一段とローカルな現実性を強めている。これはカンタベリー大聖堂が経営する、当時としては巨大な木造の宿屋であり、High Streetに面した部分は幅が約30メートルもあった。1階は店舗として貸し出され、2階は個室、3階は巨大な大部屋があって、大聖堂に大きな収入をもたらしていたようだ (Dobson 1985, 139-40)。さて、宿屋にホストに率いられたサザックからの一行が到着するやいなや、彼らはパーメイドに迎えられ、このパーメイドはいささか怪しげな調子で免罪符売りに話しかける。

Quod she with a frendly look, al redy for to kys.
And he, as a man i-learned of such kyndnes,
Braced hir by the myddill and made hir gladly chere,
As thoughte he had i-knowe hir al the rather yeer.
She haled hym into the tapstry, there hir bed was made.
'Lo, here I ligg', quod she, 'myself al nyght al naked,
Without mannes company, syn my love was dede'. (Bowers 1992, 23-29)

売春婦とも疑われるような振る舞いだが、フィクションの事であるから当時の宿屋、The Checker of Hopeにこのような女性が実在したなどとナイーブな事は言うまい。しかし、多くの旅行者でにぎわうカンタベリーでその種の事が行われていたことは想像できる。事実、ロラードは、巡礼達に対する宿屋の持ち主や酒場の女達の不道德なサービスの提供をしばしば糾弾した (Webb 2000, 226)。

しかし、こうした宿屋を利用できない、大変貧しい巡礼達もいたはずである。カンタベリーにはいくつかのhospitalがあったが、その様な貧しい巡礼はこれらのホスピタルに泊まる事が出来ただろう。今のカンタベリーのメイン・ストリート、St Peter's Streetには、Eastbridge Hospitalが中世の姿を

とどめて残っている。当時のカンタベリーのhospitalは、今の病院とは違い、貧しい人々の宿舎であって、病人の治療を専門とする近代的なホスピタルとは目的が異なり、旅人もいれば病人もいる、という状況であったろう。1342年のEastbridge Hospitalの規則では、旅人を収容するに当たって、貧しい病気の巡礼が、健康な人より優先権を与えられる、とある (Webb 2000, 224)。しかし、病気の治癒を求めてカンタベリーに来る巡礼が多数いたからには、伝統的な薬の処方など、ある程度の医療行為が、これらのホスピタルあるいは修道院で行われていたことは想像に難くない (Rawcliffe 2002, 116)。

更に、現代の日本の寺社における参拝者のように、巡礼達は種々の土産物やお供えに金銭を使ったようである。中でもよく発見される品物は金属の壺である (ampulla)。⁶既に述べた騎士ジョーダンに関する奇跡物語におけるように、巡礼達は聖なる力を持つと言われる水をカンタベリーから小さな壺に入れて持って帰り、それを土産として故郷で待つ人々に渡したことだろう。実際、その様な目的で作られた金属の壺はカンタベリーだけでなく、ヨーロッパや中近東のあちこちで見られた。早い例では、既に6世紀のパレスティナ製の壺もある (Webb 1999, 25)。こういった土産物は広い意味でのrelicsと言えよう。そしてその水の中にベケットの血がわずかでも混じっていると人々が考えたならば、これらの壺の水がベケット崇拝の拡大に果たした役割は軽視できない (Webb 2000, 47)。『カンタベリー物語』の「免罪符売りの話」が終わった後、語り手の免罪符売りは次のように宿屋の主人に言う。

I rede that oure Hoost heere shal bigynne,
For he is moost envoluped in synne.
Com forth, sire Hoost, and offre first anon,
And thou shalt kisse the relikes everychon,
Ye, for a grote! Unbokele anon thy purs. (VI 941-45)

ここに出てくる'relics'であるが、これは恐らく日本語訳の「聖遺物」と

いうお堅い言葉で感じられるような、亡くなった人の遺骨や実際に身につけていたものではなく、聖地からもたらされた土産物程度のニュアンスであろう。ダイアナ・ウェップは次の様に書いている。

The term 'relics' is less likely to signify human remains than any object or objects which had formed part of, or been in contact with, a shrine, from dust and chips of masonry to fragments of cloth (Webb 1999, 25-26).

【カンタベリー物語】のプロローグにおける巡礼達はこれから出かけるところであるが、彼らの帰途の様子をチャーサーが描いていたとしたら、きっとこういった土産物を持ったバースの女房や粉屋を登場させたことだろう。事実、同時代の *Piers Plowman* には、次の様な巡礼の風刺的な描写が存在する。

...thei a leode mette
Apparailled as a paynym in pilgrymes wise.
He bar a burdoun ybounde with a brood liste
In a withwynde wise ywounden aboute.
A bolle and a bagge he bar by his syde.
An hundred of ampulles on his hat seten,
Signes of Synay and shelles of Galice,
And many a crouch on his cloke, and keyes of Rome,
And the vernicle bifore, for men sholde knowe
And se bi hise signes whom he sought hadde. (Passus V 515-24)

'An hundred of ampulles' とあるように、数は誇張としても、これが巡礼のありふれた持ち物であったことはうかがえる。更に非常によく発見される巡礼の土産物はメダル、バッジ、ないしピンであり、この文章においては、'ampulles' も見方によるとバッジであるが、'signes' とか、'many a crouch' もそうである。'shelles of Galice' や 'keyes of Rome' はそれぞれの土地の名物とでも言うべきものであり、やはり巡礼バッチの一種と考えられる。サン・フランシスコに行って、金門橋のバッジやキーホルダーを買って帰るようなものであろう。これらは大量に作られ、カンタベリーやその他

の有名な巡礼地の経済を潤したに違いない。前述の *The Tale of Beryn* はチャーサーの描いた巡礼の一行がカンタベリーに到着するところではじまる。大聖堂に参拝した一行は、その後、他の多くの巡礼がしたように、土産を買うことにする。しかしなんと粉屋と免罪符売りはそうした土産を自分のポケットにこっそり入れ、万引きをしてしまう。この事からも、巡礼が土産を買っていくというのが、いかに普通のことであったかが分かる。

Then, as manere and custom is, signes there they boughte,
For men of contre shuld know whom they had soughte.
Ech man set his sylver in such thing as they liked.
And in the meenwhile, the Miller had i-piked
His bosom ful of signes of Caunterbury broches,
Huch the Pardoner and he pryvely in hir pouches
They put hem afterward, that noon of hem it wist.... (Bowers 1992, 171-77)

こうした金属の土産物以外にも、布や木彫りの土産物もあったようだが、保存されにくいと、あまり多くは残っていないようだ。

我々日本人の寺社参拝において、土産物と共に忘れてはならないのはお供え、あるいはお布施だろう。カンタベリーをはじめ、多くの巡礼地では、参拝者達はロウソク、ないしロウをお供え物として差し出した。教会にとってはいづれにせよ無くてはならないものであるから、ありがたく受け取ったであろう。巡礼達は、自分達が聖者に治療して欲しいと思っている身体の一部、例えば腕や足をロウで作らせたり、その人物の全身像をロウで作らせるなどして教会に奉納した (Webb 1999, 92)。また、ロウではなく、銀でそれらを作って備えるものもいた。他の寺院についての資料では船の形をしたロウや銀が多く備えられているが、これは航海の安全祈願であろう。巡礼地には多くの病人や障害者が治癒を祈るために訪れるため、そうした人々のための杖も寄付された。勿論、金貨・銀貨など実際の金銭や金や宝石での指輪、ブローチといった貴金属も寄進されたのは言うまでもない (Finucane 1977, 98)。

V 巡礼の町、チョーサーの町、観光都市

話をもう一度最初に戻すと、現在のカンタベリーは多くのイギリス人にとっては、英国国教会の大本山がある、カテドラルの都市であろうが、外国人の我々の多くにとっては、『カンタベリー物語』で有名な都市という面の方が強いかも知れず、多くの観光客や英文学愛好者はチョーサーの名前に引きよせられてカンタベリーを訪れる。つまり、ベケットへの巡礼が生んだ『カンタベリー物語』は、いつしか、『カンタベリー物語』巡礼を生んだ、と言っても良いだろう。それはシェイクスピアにおけるストラットフォード・アポン・エイボン詣でほどではないにしても、カンタベリーの名声と地元の観光産業をかなり支えている。カンタベリー大聖堂の偉容から大通りひとつ隔てたすぐそばには、The Canterbury Tales Visitor Attractionという商業施設があり、入場料を払って入ると、人形を使って『カンタベリー物語』の内容の一部をおもしろおかしく紹介している。

こうした『カンタベリー物語』巡礼とでも言うべき傾向は、しかし今に始まったことではない。14世紀末、チョーサーが『カンタベリー物語』を書いていた頃、彼は既に首都では名の通った詩人であった。彼の死後、その名声は一層高まり、彼の作品は数多く筆写され、やがて印刷技術の英国移入により、刊本として公刊されて広く読まれ続ける。15世紀の詩人の多くは彼の影響から逃れられないか、努めて模倣しようとさえしたと言われる。そうした中で、既に言及した様にリドゲイトの*The Siege of Thebe*や作者不詳の*The Tale of Beryn*が書かれることとなった。

一方、ベケット巡礼の核である聖者信仰も、中世が終わると共にその根底が揺らぎ、宗教改革と共に崩壊することになる。1534年、イングランドの国王至上法(The Act of Supremacy)が公布され、これによって英国はプロテスタント国家となった。既に1527年には国王ヘンリー8世は、離婚問題においてローマ教皇と厳しく対立しており、イングランドの宗教改革の兆しが生まれていた。そうした嵐がイギリスの教会に近づきつつある1512年から

14年の間のある時、オランダの人文学者エラスムスはカンタベリーを訪れて、ベケットの霊廟などを参拝したようだ。その時の事を『対話篇』(Colloquies)において描いている(Erasmus 1957, 285-312)。ルネサンスの人文学者であるエラスムスにとっては、中世的な聖者信仰は、古めかしく、いささかグロテスクな過去の遺物に見えていたようだ。ウィクリフ派や清教徒などのように、聖者信仰に剥き出しの敵意を示しはしないが、まるで博物館を訪れた見学者のような醒めた目で、ベケットゆかりの聖遺物などを見ている、それは冷静なだけに、聖者信仰に対して大きな打撃を与える近代的な理性をうかがわせる。

宗教改革と共に、1538年、カンタベリー大聖堂のベケットの霊廟は取り壊される。トマス・クロムウェルやトマス・克蘭マーなど、プロテスタント権力者の周到な準備があったとは言え、格段の抵抗もなく、破壊が執り行われたようだ。⁷カンタベリーは英国国教会の総本山として残り、イギリスの宗教上の中心地としての重要性を維持する。しかし、ベケット信仰の薄らいだ後にカンタベリーの観光地としての人気を支え続ける大きな要因は、チョーサーの『カンタベリー物語』である。ベケット巡礼は、現在はおそらくベケット自身のためというよりも、チョーサーの傑作を生んだが故に広く世界中に記憶されることになった、という事実は大変興味深い。

注

- 1 カンタベリーの簡潔な通史としては、Lyle 2002を参照。
- 2 以下に述べるベケットの生涯と記述については、Barlow 1986を参照。
- 3 エドワード・グリムの記述による：‘...the knights exclaimed in a spirit of mad fury, “Where is Thomas Becket, traitor to King and realm?” (Abbott 1898, I 87).
- 4 エドワード・グリムの記述による：‘...in a perfectly audible voice he answered, “Here I am, no traitor to the King, but a Priest. What do you seek of me?” (Abbott 1898, I 87-88).
- 5 Cf. ‘Ever since Louis VII’s visit to the shrine of 1179 had given the French monarchy’s seal of approval to Becket’s cult, Canterbury Cathedral had been the most cosmopolitan centre of pilgrimage in north-western Christendom’ (Dobson 1995, 140).

- 6 こうした巡礼の土産物はしばしば墓の中に遺体と共におさまられたので、そういう場所で発見されることが多いようだ (Webb 1999, 128)。
- 7 宗教改革時代におけるベケットの霊廟の破壊とその経緯については、Duffy 1992, 412、および、Roberts 2002を参照。

参考文献

Primary sources

- Abbott, E. 1898. *Saint Thomas of Canterbury: His Life and Death*, 2 vols. London: Adam and Charles Black
- Bowers, J., ed., 1992. *The Canterbury Tales: Fifteenth-Century Continuations and Additions*, Kamamazoo, Michigan: Medieval Institute Publications (Including the editions of the prologue to *The Siege of Thebe* by John Lydgate and the anonymous *Tale of Beryn*)
- Chaucer, G. 1987. *The Riverside Chaucer*, ed. by L. D. Benson. Boston.: Houghton Mifflin
- Erasmus, D. 1965. *The Colloquies of Erasmus*, trans. by Thompson, C. R. Chicago: University of Chicago Press
- Froissart, J. 1968. *Chronicles*, trans. by Brereton G. Harmondsworth: Penguin
- Langland, W. 1978. *The Vision of Piers Plowman: A Complete Edition of the B-Text*, ed. by Schmidt, A. V. C. London: J. M. Dent & Sons
- Staunton, Michael. 2001. *The Lives of Thomas Becket*, Manchester: Manchester University Press

Secondary books and articles

- Barlow, F. 1997. *Thomas Becket*, 1986; repr. London: Orion Books
- Brown, P., Hutchinson, S. and Irwin, M. 1990. *Written City: A Literary Guide to Canterbury*, Canterbury: Yorick Books
- Dobson, B. 1995. 'The Monks of Canterbury in the Later Middle Ages' in *A History of Canterbury Cathedral* ed. by Collinson, P., Ramsey, N. and Sparks, M. Oxford: Oxford University Press, 69-153
- Duffy, R. 1992. *The Stripping of the Altars: Traditional Religion in England c.1400-c.1580*, New Haven: Yale University Press
- Finucane, R. C. 1975. 'The Use and Abuse of Medieval Miracles', *History* 60, 1-10
— 1977. *Miracles and Pilgrims: Popular Beliefs in Medieval England*, New York: St Martin's Press
- Lyle, M. 2002. *Canterbury: 2000 Years of History*, revised edition, Stroud, Gloucestershire: Tempus
- Morris, C. and Roberts, P. eds. 2002. *Pilgrimage: The English Experience from Becket to Bunyan*, Cambridge: Cambridge University Press

- Rawcliffe, C. 2002. 'Curing Bodies and Healing Souls: Pilgrimage and the Sick in Medieval East Anglia' in Morris and Roberts 2002, 108-40
- Roberts, P. 2002. 'Politics, Drama and Cult of Thomas Becket in the Sixteenth Century', in Morris and Roberts 2002, 199-237
- Ward, B. 1982. *Miracles and Medieval Mind: Theory, Record and Event 1000-1215*, London: Scholar Press
- Webb, D. 1999. *Pilgrims and Pilgrimage in the Medieval West*, London: I. B. Tauris
— 2000. *Pilgrimage in Medieval England*, London: Hambledon and London